

女性作家たちの戦争協力 - 林芙美子の足跡をたどって -

遠藤 真衣

作家の“戦争協力”とは、1937年（昭和12年）からの日中戦争および太平洋戦争下で、日本の作家たちが戦争賛美的な小説や詩、エッセイを発表することで国民を戦争に駆り立てたとされる行為のことである。特に、作家自らが戦地に行き、そこでの日本軍の活躍を勇ましく書きたて、戦争を素晴らしいものとして褒めたたえるような報告を行ったことが、今日では“戦争協力”的な行為として批判されている。その中でも特にこの論文で中心に取り上げる林芙美子は、1938年の漢口攻略戦に「一番乗り」したことで、女性作家たちの中でも“戦争協力”作家として強い批判をされている作家である。

一般的には今までの作家研究では、こうした“戦争協力”的な作品は大きく取り上げられず、また作家の人生全体に及ぼした影響について論じられることはほとんどなかった。同時に、“戦争協力”行為は単純に断罪されることが多く、その実態を細かく考察したものは少ない。

本研究では、林芙美子を中心として当時の女性作家たちが行った“戦争協力”的行為について時代背景も考慮しながら、その実態と及ぼした影響について探ることを目的とする。

第一章では、“戦争協力”の行われた日中戦争・太平洋戦争下での日本の思想統制や女性作家の立場についてまとめた。同時に、戦場に新聞や雑誌の「特派員」や「ペン部隊」として送りこまれた作家達についてもまとめ、“戦争協力”が作家たち全般にとってどのようなものであったのかを考察した。

第二章では、林芙美子の“戦争協力”までの道のりを述べるとともに、漢口攻略戦に「ペン部隊」として従軍した時の経験を記した作品『戦線』（38年）と『北岸部隊』（39年）の内容を分析し、この従軍経験で林芙美子が受けた影響について考察した。

第三章では、漢口攻略戦から日本に帰ってからの林芙美子の変化について述べるとともに、1945年（昭和20年）の終戦以降に書かれた作品についてもまとめ、林芙美子が戦前・戦中・戦後とどのように変化していったのかを考察した。

第四章では、同時代に活躍した吉屋信子・佐多稲子・大田洋子ら三人の女性作家をとりあげ、その“戦争協力”の内容とそこから受けた影響について考察した。同時に、これら三人の女性作家と林芙美子を比較し、女性作家全体にとっての“戦争協力”の実態と共に、もう一度林芙美子にとって“戦争協力”とは何だったのかを考察した。

女性作家たちにとって“戦争協力”的な行為は、時代の要請と自分達が生きていくため・自己表現を行うために必要だったものがかみ合った結果為されたものだと考えられる。しかしその意味合いは個人ごとに違う。林芙美子の場合は、“戦争協力”によって生きることへのやるせなさや暗さが作品中に強く現れるようになったなど、自身の生き方や文学観に大きな影響を受けており、それは戦後の命を縮めるほどの作家活動に結び付いていた。林芙美子にとって“戦争協力”は作家人生の大きな転機だったのである。

（指導教員 黒古一夫）